

セレンディピティの構造研究によるイノベーション促進

志賀 敏宏 経営情報学部 事業構想学科 教授

多摩大学教員サイト

<http://www.tama.ac.jp/guide/teacher/shiga.html>

キーワード

イノベーション、セレンディピティ、イノベーションプロセス、イノベーション人材、偶然、幸運、発見

概要

本研究室では、イノベーションのプロセス分析を基礎として、イノベーションの成功要因に関する研究を行っている。イノベーションには技術革新を起点・核心とする類型（例えば航空機、ペニシリン、トランジスタ等）とそれ以外の類型（学校、教科書、割賦販売等）があるが、両者を研究対象としつつ、主眼を前者に置いている。

さらに、イノベーションの発見的特徴を先鋭的に示す「セレンディピティ」（偶然を重要な契機とするイノベーション）を研究の中心に据えている。セレンディピティは、「重要な契機となる偶然」、「その偶然の誘引要素である必然（意図的活動）」、「偶然から革新的な価値を洞察する必然（同左）」からなる構造を有する。

例えば、ペニシリンの発見は、「ブドウ球菌変異株の培養（必然）」－「青黴の混入（偶然）」－「青黴からの浸潤液によるブドウ球菌コロニーの成長阻害の発見（必然）」という構造である。しかし、これらの必然・偶然を詳細にみると、「有効な抗菌剤に対するフレミングの強い目的意識（必然）、当該研究施設の収益源が予防接種でありアレルギーのひとつとして黴を研究していたこと（偶然）、当年のロンドンが当初冷夏であり青黴が先に繁殖したこと（偶然）、全ての実験結果を得るまでは廃棄しないフレミングの思考様式（必然）」等のより細かな構成要素からなり、それらの相互作用でセレンディピティ（イノベーション）が成就していることが分かる。これを仔細に分析し、本質的な因果関係を考察することにより、イノベーションにおいて発見の可能性を如何に高めうるか、そのためのマネジメントのあるべき姿を見出すことができる。

セレンディピティの構造研究から、イノベーション一般に有効なプロセスマネジメントを導き、それに適する人材要件、動機付け、それを可能とするコーポレートガバナンス等、経営への有効な示唆が得られる。

利用・用途

応用分野

セレンディピティ研究から得られるイノベーションへのヒント、経営への示唆は、決して技術革新が大きな役割を果たす非連続なイノベーションのみに適するものではない。ドラッカー（『イノベーションと企業家精神』ダイヤモンド社、2007）は、イノベーション機会の内、最も成功確率が高いのは「思いがけぬ成功、思いがけぬ失敗」としてセレンディピティを重視している。身近なイノベーションにおいても、発見は中心要素として重要であり、それは偶然の契機によってもたらされることが多いのである。

関連論文・著書

1. 『イノベーションの創発プロセス研究』文真堂、2012年4月
2. 「セレンディピティによるイノベーションの事例研究とモデル提案」『多摩大学 経営・情報研究』、第19巻、87-102頁、2015年2月
3. 『セレンディピティの構造研究-偶然と必然の相互作用』博士課程学位論文（技術経営、東京理科大学伊丹敬之研究室）、2015年2月
4. 「事業創造セレンディピティの構造研究」『多摩大学 経営・情報研究』、第22巻、17-34頁、2017年12月